両大戦間におけるロシア極東地方の人口動態

——囚人移動を中心に——

中村泰三

はじめに

先にロシア極東地方の人口について人口移動の観点から、ロシアの植民開始期から現在まで概観した小論を発表した。[1]

その際革命後特に一九二〇、三〇年代の人口移動の解明が不十分であったのが心残りであった。今回は先の発表後にロシアで公刊された文献を中心に、両大戦間のロシア極東地方の人口動態について人口移動を中心に眺めてみようというのがこの発表の主旨である。

両大戦間のこの地方の人口移動、特に人口流入はロシアの他地域と比べて顕著であった。これは新しい開発地であり、この地に新しい工業拠点を築くことを目指してソ連政府が力を入れてきたことにある。この人口流入に関して見逃すことのできない大きなファクターは囚人の移動であった。もともと帝政時代よりシベリアは流刑地として名高いが、両大戦間のこの地域は強制収容所を中心とした多数の囚人の移送地となり、彼らを利用してこの地域の開発が進められたからである。先の発表ではこの問題について触れていない。これはロシア極東地方一五〇年間の人口の動きをまとめ、出版したリバコフスキーもこが流刑地であることを書いているが、[2]その数や移動、開発の上での囚人労働の評価がなされていなかったことにもよる。つまり資料不足がこの問題の所在にもかかわらず、触れずにおいた理由である。

前述の諸点をふまえてここでは、ロシア極東地方への囚人の移動数や開発に果した役割、これと関連してロシアで研究が進められた一九三九年の人口センサスにみられる作為、特に行政地域別人口の作為的再配分やこの地方居住の朝鮮族の中央アジアへの強制移住（移動実数を中心に）についても考察してみたい。

一　両大戦間のロシアの人口センサス

一—一　一九二六、三七、三九年センサスの評価と修正

ロシア極東地方の両大戦間の人口移動をみる前に、この期に実施された一九二六、三七、三九年センサスにもとづく人口及びそれに対する評価、センサス人口の修正についてまず触れなければならない。

これまでのソ連の人口と関係する研究でセンサスについて必ずしも十分に検討されてきたとは言い難い。勿論センサス結果をどうみるかあるいはその数字の正当性についての疑は第二次大戦前より西側の研

究者により取上げられてきた。[3] けれどもセンサス結果を修正するほどの資料が西側にあったわけではなく、推量、憶測の域を出なかった。多くの研究はソ連で公刊されたセンサス人口を用いてそれを利用、加工してきたのである。

しかし、ペレストロイカ以降これまで秘密扱いされてきた公文書が公開されるに及んで、センサス結果の評価及び修正が一九九〇年代より公表されるようになった。ここで取扱う両大戦間の諸センサスの人口数の過小、過大評価が指摘され、新資料にもとづく修正人口数を発表するようになった。特に、ここで扱うロシア極東地方の人口は調査期の政治状況を反映してセンサス人口は実数と異るかなりの歪曲がなされていたので、これを修正した研究成果を抜きにして両大戦間の人口の動きを把握することはできなくなっている。

農業集団化と関連して人口数の激変はウクライナ、カザフスタンの人口減少（ウクライナは大凶作も加わるが）として早くから知られているが、最近の研究で減少数の大きさが改めて注目されるほどの規模になっている。ロシア極東地方でも後に述べる強制収容所での収容人員の激増が一九三七、三九年のセンサスに正確に反映されていない点が問題なのである。

一―二　一九二六年センサスの結果と評価

一九二六年のセンサス結果の評価に関して集計された人口数が実数より多いとする評価と少ないとする評価があり、全く異なる研究成果が出ている。

実数より大きいとする見解はセンサス実施期が都市と農村で異なり（農村での調査期間が長い）、そのためこの期間に都市へ移動した農村居住者が都市で登録された、つまり二重登録により全人口の一パーセント、一〇〇万人が過大になったというのである。[4]

他方実数より少ないとする論者（近年の研究者が中心であるが）は〇～二歳層が実数より少ないと見做している。ロシア共和国のスラブ系民族で、一七、一万人、チュルク、フィン・ウゴル系の諸民族で七、五万人少ないとしている。また、ロシア共和国の非スラブ系民族の早婚により八～十四歳層で結婚した女性や一夫多妻制による複数の妻の過小申告がある。その他ロシア共和国の非スラブ系民族の十二～十六歳層の女性の実数より少ない数（極東地方の少数民族も含まれるが）の修正（一、四万人増）が必要とされた。[5]

その結果、ロシア共和国で二六、二五万人、全人口より〇、三パーセント少なく報告されたことになる。従って、ロシアのセンサスによる人口九、三一一万人に対し、九三五〇万人（カザフスタンとキルギジアを除く）となる。ロシア極東地方はこの時人口一二七万人であったので、修正値は後のセンサスの人口数の修正に比べわずかである。

一―三　一九三七、三九年センサスの結果と評価

次に一九三七年と三九年のソ連の人口数の評価に移ろう。これについては全く異なった結果が出ている。三七年の調査数については過小評価で、諸研究者により実数より四五万から二〇〇万人、すなわち、〇・三～一・二パーセント少ないと見做されている。これに対して三九年のセンサス数は一五〇～二四〇万人、〇・九～一・四パーセントの過大評価とされている。[6]

一九三七年センサスは一九三〇年代中ばをすぎてくると一九二六年センサスからかなりの年月が経過し、その間農業集団化と工業化政策により国と各地域の人口数の変動が著しく、新たにセンサスを実施し、最新の正確な人口数を把握する必要が生じたことによる。

しかしこの調査は公表されなかった。スターリンがセンサスの人口数に不満であったからである。スターリンは第十六回党大会でソ連の年間自然増加数は三〇〇万人であり、これは社会主義体制下での出生率の増大、死亡率の減少により生じたとしていたからである。

従って、一九二六年の人口総数一、四七億人も十年たてば一、八〇七億人になるはずであった。しかし、三七年の調査では一、六二億人と予想より極めて低い数字に止まった。いうまでもなく一九三〇年代初めの農業集団化の強行によるクラークの処刑、追放、大粛清による死亡者の増大などにもとづくものであった。しかし、この事実は伏せられ、人民の敵による悪意からセンサスの人口数が歪められたとして公表されなかったのである。[7] 同時にセンサス実施の責任者であった統計局の指導者のクラバーリ、ノビトキンは銃殺され、多くの関係者が逮捕された。

現在の一九三七年のセンサスについての研究結果は種々あるが、一九三七年のソ連の人口は公表一、六二億人に対し修正一、六三億人、ロシア共和国連邦は公表一、〇四億人に対し修正一、〇四五億人とするのはその一例である。[8] もちろんこの修正は全国だけでなく各地域でも行われなければならなかった。一九三七年センサスは二年後の短い経過期間をへて三九年センサスが実施されたので、その詳細は公表されなかった。そのため西側でこのセンサスについて種々評価、推測がなされていた。しかし、詳細は明らかでなかったが、ペレストロイカ以降、特に一九九〇年代のこれまで公開されなかった秘密資料の開示により、センサスの問題点と作為が日の目をみることになったのである。

ソ連が一九三七年実施したセンサスの二年後に再び人口調査を行ったのは一九三七年の人口数がゴスプランの予測を下回ったからで先述のスターリンの不満もそうであるが、センサスに欠陥があると宣言され、三九年にセンサス調査を行った。しかし、このセンサスで人口数の上のせがなされたのである。三九年の人口調査は初めから目標数値があり、一九三九年のソ連領で一、七〇五億人というのがそれであった。[9]

一九三九年センサスの過大評価は、ソ連の予定していた人口増より低い人口数を隠す理由があったからであるが、センサス資料の歪曲は最近の開示資料から明らかになっている。スターリンのモロトフ宛の秘密書簡から一九三九年人口を一億六七三〇万人にする、つまりセンサス人口より三二〇万人過大に見積っている。[10] この理由は先述の工業化による高い経済成長率と都市化の進展の結果による高人口増加率を見積っていて、一九三〇年代末に一、七～一、八億人に達するという予想人口数が出ていたからである。また、国内各地の人口動態のアンバランスを修正する必要があり、全人口数の歪曲とともに各地域の人口数の歪曲も行われたのである。

なお現在三九年センサスの実数について種々検討されている。それによると一、六八から一、七〇五億人の間にあるが、ソ連の人口は公表一、七〇五億人に対し修正一、六七六～一、六七七億人、ロシアで

公表一、〇九四億人、修正一、〇七九億人であった。従って、ソ連邦で二〇〇万台の違いで、全人口の一パーセン台の差であるが、[11] 地域別でみた場合公表数字との乖離の大きい地域があり、科学的研究の基礎資料として公表数は許容範囲といえないのであり、ロシア極東地方はその地域の一つに当る。

一―四　両大戦間のロシア極東地方の人口増加

一九三七年と一九二六年のセンサス人口を比較すると極東クライの人口は約二倍に増加していてロシアで最大の伸び率を示した。ロシア全体で人口増加は一〇パーセント強であり、他に最も人口増加率の高かったのはモスクワ市であるが、増加率は極東地方より僅であるが少なかった。また、東シベリアで増加率が高かったが、それでも四〇パーセント強の増加であった。なお、一九三七年のロシアの総人口は一億三九六八万で、一九二六年に比べ一一・七パーセントの増加であった。

一九三七年センサスから二年経って行われた一九三九年のセンサスでは、極東地方は約二八〇万人で一九二六年に比べて二倍強の増加であり、モスクワ市の二倍強の増加に等しい急激な増大ぶりであった。なお、この時のロシアの人口総数は一億九四〇万人、一一七パーセントの増加率であった。

ところで南北に長くのびる極東地方の各地は自然条件の違いや開発重点地の偏在により人口増加率に違いが認められる。最も増加率の高いのは、人口数は少ないが、下アムール州で三倍以上の増加であり、これに次いでハバロフスククライが二倍以上の増加であった。これに対してプリモルスキークライやウスリー州で人口増加率は低かった。

都市と農村ではがいして都市の人口増加率が高く、プリモルスキークライ、ハバロフスククライの都市人口が急増している。農村ではハバロフスククライ、下アムール州で高いが、プリモルスキークライ、ウスリー州で減少していて、センサス期間の開発がハバロフスククライ、下アムール州で農、工業部門で共に進められたことを示している。ジロムスカヤはクラバールが極東地方とその他の地域の人口増を工業化、都市化の成功によると説明し、これらの地域が囚人の集中地域であることに言及していないと批判しているが、[12] 次章で述べるように各種囚人の増加が極東地方の人口増に著しく貢献しているのである。

二　センサスと囚人

二―一　農業集団化によるクラークの移動

両大戦間のロシアの人口は順調に増加したわけではなかった。革命後の内戦、飢饉、農業集団化による国外逃亡、一九三〇年代後半を中心とした大粛清、伝染病の猖獗により人口増が停滞、減少した時期でもあった。特に、一九三三年の人口の自然減、一九三四年の人口減は目立っている。その間極東地方の人口は社会増により高い成長率を示し、増大していた。つまりヨーロッパ部で顕著であった農業集団化期のクラークの追放、その後の大粛清による都市民を中心とした多数の北部、東部の収容所への移送が人口増大の重要ファクターであった。ここではまずクラークの極東地方への移送についてみてみよう。

一九二九年から三三年にかけて行われた農業集団化で他地域へ強制

表1　ロシア極東地方の人口（1926，1937年）

	1926			1937			1937/1926
	男	女	計	男	女	計	
極東クライ	683,769	589,626	1,273,395	1,439,449	1,041,736	2,481,185	194.8
含ユダヤ自治州	19,007	16,533	35,540	80,215	40,789	121,004	340.5
ヤクート自治共和国	150,029	133,439	283,468	195,181	165,440	360,621	127.2
計	852,805	739,598	1,592,403	1,714,845	1,247,965	2,962,810	186.1
ロシア	4,4007,341	4,9100,405	93,107,746	48,726,033	55,241,891	103,967,924	117.7

「1930年代のロシア人口史」M.2001，c.40—41

表2　ロシア極東地方の人口（現境界）1000人

	1926			1939		
	総人口	都市	農村	総人口	都市	農村
プリモールスキークライ	637	173	464	888	452	436
ハバロフスククライ	183	69	114	658	416	242
含エフレイ自治州	36	9	27	109	72	37
アムール州	414	106	308	634	289	345
カムチャッカ州	19	2	17	109	35	74
含コリャーク民族管区	10	—	10	23	—	23
マガダン州	20	—	20	173	31	142
含チュコト民族管区	13	—	13	21	3	18
サハリン州	12	3	9	100	50	50
ヤクート自治共和国	287	15	272	414	112	302
計	1,572	368	1,204	2,976	1,385	1,591

「ソ連の人口　1937」M.1975. c.18

表3　ロシア極東地方の人口（1926，1939）

	1926			1939			1939/1926		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
沿海州	356,412	282,540	638,952	479,920	426,885	906,805	134.7	151.1	141.9
含ウスリー州	199,183	168,381	367,564	230,035	208,912	438,947	115.5	124.1	119.4
ハバロフスククライ	320,793	284,430	605,223	827,967	631,762	1,459,729	258.1	222.1	241.2
含アムール州	193,413	180,911	374,324	227,231	221,028	448,259	117.5	122.2	119.8
カムチャッカ州	18,124	16,651	34,775	74,193	58,606	132,799	409.4	352.0	381.9
下アムール州	17,217	13,604	30,821	52,263	46,217	98,480	303.6	339.7	319.5
サハリン州	7,021	4,838	11,859	52,719	47,206	99,925	750.9	975.7	842.6
ユダヤ自治州	19,037	16,533	35,570	58,540	50,398	108,938	307.5	304.8	306.3
ロシア	44,354,699	49,103,297	93,457,996	51,593,770	57,803,693	109,397,463	116.3	117.7	117.1
極東地方	738,604	618,596	1,357,200	1,545,602	1,261,074	2,806,676	209.3	203.9	206.8

「全ソ人口センサス，1939」サンクトペテルブルグ，1999，c.20,21.

移住させられたクラーク及びそれと認定あるいは反革命分子とされた中農などの農民は（一九三四年まで特殊移民、一九三四～一九四四年労働移民と呼ぶ）一九三〇～三一年三八万一一七三家族、一九三二～四〇年二一七万六六〇〇人（一九三三年まではほとんど農民、その後はそれ以外の人も入る）であった。[13] 従って、一九三〇～四〇年に約四〇〇万人が故郷を追われ、新しい土地に強制移住させられたことになる。彼らの移された新しい土地は未開発地であり、そこを開発させることが政府の意図であった。

移住者の大部分、四分の三以上はロシア共和国に移され、共和国内の東部―ウラル、東西シベリア、極東地方が中心であった。移住者の絶対数ではウラル、西シベリアが中心であったが、極東地方も居住者数からみて少なかったわけではない。一九三二、三三年に四万人余の移住者を数え、一九三八年には一二八集落、約三万人を数えた。[14]

強制移住先での人口動態は、生活環境の悪さから死亡者が多いのが特色で、当初は死亡者が出生者を大きく上廻って（一九三三年極東クライで四・一倍）いて、以降漸次出生者が死亡者を上回るようになるが、それでも死亡者の比率が高かった（一九三七年、一九三八年出生者の四〇パーセント強）。また、生活環境の悪さから逃亡者も多かった。（一九三二～四〇年の逃亡者は六二万九〇四二人、帰還者二三万五一二〇人）。[15]

二―二　ラーゲリの収容者数

いわゆるラーゲリ、強制収容所での収容者数、そこでの死亡者数、収容所の分布と収容者数などについての詳しい調査、報告は十分になされているわけではなく、前記についての正確な数字は明らかにされていない。なぜなら従来これらの資料は秘密扱いされ、一般に公開されず、公開されるようになった一九九〇年代になって調査、研究が始められたからである。大量の個別資料、報告、メモなどに分れた資料の整理、精査がまだ不十分で、全面的な分析が進行中であるが、結論にまで達していない。

これまで収容所に関する種々の推測が西側の研究者により行われてきたが、推測数に大きな違いがあった。ソ連では一九九〇年前後に文学新聞、論拠と事実紙、オクチャブリ紙などに発表された数字は以下のようであった。

一九三五～四一年の逮捕者は一、九八四万人で、その内七〇〇万人は死刑に、他の大部分はラーゲリで死亡した。また、粛清の最中、一九三七、三八年の銃殺者は六八万一七〇〇人（一九三七年三五万三、一〇〇、一九三八年三二万八、六〇〇人）、ラーゲリでの死亡者一一万五、九〇〇人を合わせて七九万七、六〇〇人という数字である。[16] もちろん、これ以外に重刑の宣告を受けた者や記録もれなどの人々を考慮すると死亡者は約一〇〇万人だとイスポフは述べている。[17]

ラーゲリの収容者は一九三〇年代に増加する。一九三〇年に一七、九万人を数えたが、一九三一年二一、二万人、三二年二六万八、七〇〇、三三年三三万四、三〇〇、三四年五一万三、〇〇〇、三五年七二万五、五〇〇、三六年八三万九、四〇〇、三七年八二万九〇〇、三八年九九万六、四〇〇、と年々増加を続けた。その間ラーゲリ数も増え、一九三〇年の一一から三三年一四、三九年三四と急増している。なお、ソ連時代ラーゲリのほとんどはロシアにあり、例えば、三九年

表4　NKVDの囚人数と収容所の所在地（1931.1.1）

ラーゲリ	人数	
	人	%
バムラグ（バム）	262,194	20.05
北東ラグ（マガダン）	138,170	10.56
ベルバウラグ	86,567	6.62
ボルゴラグ（ウグリチ・リイビンスク地区）	74,576	5.70
ダリラグ（ウラジオストクラグ）	64,249	4.91
シブラグ（ノボシビルスク州）	46,382	3.55
ウショスドルラグ（極東）	36,948	2.83
サマルラグ（クイビシェフ州）	36,761	2.81
カルラグ（カラガンダ州）	35,072	2.68
サズラグ（中央アジアＩＴＬ）	34,240	2.62
ウソリラグ（モロトフ州）	32,714	2.50
カルゴポリラグ（アリハンゲリスク州）	30,069	2.30
セフジェルドルラグ（アリハンゲルスク州・コミ自治共和国）	29,405	2.25
ヤグリンラグ（アリハンゲルスク州）	27,680	2.12
ビヤゼムラグ（スモレンスク州）	27,470	2.10
ウフティムラグ（コミ自治共和国）	27,006	2.06
セブウラルラグ（スベルドロフスク州）	26,963	2.06
ロクチィムラグ（コミ自治共和国）	26,242	2.01
テムラグ（モルドバ自治共和国）	22,821	1.75
イブデリラグ（スベルドロフスク州）	20,162	1.54
ボルクトラグ（コミ自治共和国）	17,923	1.37
ソロクラグ（アルハンゲリスク州）	17,458	1.34
ビャトラグ（キーロフ州）	16,854	1.29
オネグラグ（アルハンゲリスク州）	16,733	1.28
ウンジラグ（ゴーリキ州）	16,469	1.26
クラスラグ（クラスノヤルスククライ）	15,233	1.16
タイシェトラグ（イルクーツク州）	14,365	1.10
ウスチビムラグ（コミ自治共和国）	11,974	0.92
トマシンラグ（ノボシビルスク州）	11,890	0.91
ゴルノ・ショリヤＩＴＬ（アルタイクライ）	11,670	0.89
ノリリラグ（クラスノヤルスククライ）	11,560	0.88
クロイラグ（アルハンゲリスク州）	10,642	0.81
ライチフラグ（ハバロフスククライ）	8,711	0.67
アルフブムラグ（アルハンゲリスク州）	7,900	0.60
ルジスキーラーゲリ（レニングラード州）	6,174	0.47
ブカチャチラグ（チタ州）	5,945	0.45
プロルフラグ（アストラハンラグ）	4,877	0.37
リコフラグ（モスクワ州）	4,556	0.35
ユジナヤガワニ（モスクワ州）	4,376	0.33
スターリンスタンツィア（モスクワ州）	2,727	0.21
ドミトロフスキーメフザボード（モスクワ州）	2,273	0.17
№211建設（ウクライナ共和国）	1,911	0.15
計	1,307,912	100.00

「20世紀のロシアの人口　第1巻」312～313頁

には全体の九四・六パーセント、一二三万六、六八九人がロシアに所在するラーゲリに収容されていた。[18]

二―三　センサスの地域別人口の改ざん

内務人民委員部管轄のラーゲリは全ソ連に分布しているが、前述のようにロシア共和国にほとんどがある。さらにシベリア、極東地方に多く、一九三九年の数字では五〇パーセント近くに達している。また、ロシア極東で全体の約二〇パーセントを占め、人口数をみても小さなものではない。

最も古いのはウラジオストクにある極東ラーゲリで、一九三〇年代初めから存在し、収容者は一九三七年一一万人をこえている。[19] この数字はソ連のラーゲリ収容者の一五パーセントほどを占める。また、規模の大きいラーゲリはマガダンに本拠のある北東ラーゲリで、三四年までに存在し、ソ連の収容者の一〇パーセント強（一九三九）を占めていた。その他にライチクラグ、ウショスラグがあった。北東ラグの資料は不十分であるが、一九三〇年代末のラーゲリの死亡率水準は最悪で、他のラーゲリを大きく引き離していたといわれる。

他方監獄コロニーの収容者はラーゲリより少なく、全ソ連で一九三五年二五、四万人、三八年八八、八万人であった。ロシア極東では三五年三、五三三人、三八年二万五、五四六人であった。[20] このように囚人を収容するラーゲリ数とその収容人員の増大が極東地方の人口増に大きく貢献している。

先述したように一九三九年センサスの人口総数は一七五万人の水増（水増総数二五〇万人から囚人の再分布数七八万人を引いた数）があ

表5　1939年人口（センサス数と修正人口）

	センサス人口	修正人口	水増 実数	水増 %
プリモールスキークライ	906,805	884,373	22,432	2.5
ウスリー州	438,947	404,715	34,232	8.5
ハバロフスククライ				
アムール州	448,259	438,299	9,960	2.3
下アムール州	98,480	95,231	3,249	3.4
サハリン州	99,925	97,280	2,645	2.7
ユダヤ自治州	109,938	106,870	2,068	1.9

カムチャッカ州，ヤクート自治共和国は不明
ハバロフスククライは特例で作製された地域の一つに入る

	1939年人口	センサスリストから除外	返送リスト	修正人口	修正人口数の追加(%)
ハバロフクスクライ	1,459,729	232,530	23,120	1,669,139	12.6

「1930年代のロシア人口史」M.2001，c.55.56

表6　1939年センサスの州・クライ・共和国人口に対する追加（%）

行政地域	全人口			都市			農村		
	男子	女子	計	男子	女子	計	男子	女子	計
アルハンゲリスク州	—	—	-3.5		不明			不明	
ボロゴド州	3.7	0.9	2.2	3.2	0.9	1.9	3.9	0.9	2.3
ボロネジ州	3.7	0.9	2.2	3.1	0.9	1.9	3.8	0.9	2.2
ゴーリキー州	3.7	0.9	2.2	3.1	0.9	2.0	4.0	0.9	2.3
イワノボ州	3.8	0.9	2.2	3.3	0.9	2.0	4.1	0.9	2.4
イルクーツク州	4.2	1.0	2.5	2.9	0.9	1.9	4.8	1.0	3.0
カリーニン州	3.8	0.9	2.2	3.3	0.9	2.0	3.9	0.9	2.3
キーロフ州	3.2	0.9	1.9	3.2	0.9	1.9	3.2	0.9	1.9
クイビシェフ州	3.8	0.9	2.3	3.1	0.9	2.0	4.1	0.9	2.4
クルスク州	3.7	0.9	2.2	3.2	0.9	2.0	3.7	0.9	2.2
レニングラード州（除レニングード）	3.5	0.9	2.1	1.3	0.9	1.1	4.4	0.9	2.5
ペルム州（除ペルム）	3.8	0.9	2.2	3.2	0.9	2.0	4.2	0.9	2.4
モスクワ州（除モスクワ）	3.5	0.9	2.1	1.9	0.9	1.4	4.7	0.9	2.7
ムルマンスク州	4.9	1.0	3.1	2.9	1.0	2.0	16.0	1.4	9.3
ノボシビルスク州	—	—	-0.3		不明			不明	
オムスク州	3.4	1.0	2.1	3.1	0.9	1.9	3.5	0.9	2.1
オリョール州	3.7	0.9	2.1	3.1	0.9	2.0	3.9	0.9	2.2
ペンザ州	1.0	0.9	0.6	0.7	0.2	0.4	4.4	0.3	0.6
ロストフ州	3.8	0.9	2.3	3.1	0.9	2.0	4.4	1.0	2.6
リャザニ州	3.6	0.9	2.1	3.0	0.9	2.0	3.7	0.9	2.1
サラトフ州	4.0	0.9	2.3	3.2	0.9	2.0	4.4	0.9	2.5
スモレンスク州	3.8	0.9	2.7	3.2	0.9	2.0	3.9	0.9	2.3
スターリングラード州	3.7	0.9	2.2	3.2	0.9	2.0	4.1	0.9	2.4
タムボフ州	3.8	0.9	2.2	3.4	0.9	2.1	3.9	0.9	2.3
ツーラ州	3.7	0.9	2.2	3.1	0.9	2.0	4.1	0.9	2.4
チェリヤビンスク州	3.7	0.9	2.2	3.1	0.9	2.0	4.1	0.9	2.4
チタ州	5.5	1.1	3.4	2.8	1.1	2.0	7.9	1.1	4.5
チカロフ州	3.7	0.9	2.2	3.1	0.9	2.0	3.8	0.9	2.3
ヤロスラフ州	3.5	1.1	2.2	3.2	1.0	2.0	3.7	1.1	2.3
タタール自治共和国	3.7	0.9	2.2	3.2	0.9	2.0	3.8	0.9	2.2
バシキール自治共和国	3.5	0.9	2.1		不明			不明	
ダゲスタン自治共和国	3.7	0.9	2.3	2.9	1.0	2.0	3.9	0.9	2.3
ブリャト・モンゴル自治共和国	—	—	-3.1		不明			不明	
カバルディノ・バウカル自治共和国	3.5	1.0	2.2	3.1	1.0	2.0	3.6	1.0	2.3
カルムイク自治共和国	3.4	1.0	2.2	3.0	1.0	1.9	3.4	1.0	2.2
カレリヤ自治共和国	—	—	-12.0		不明			不明	
コミ自治共和国	—	—	-22.7		不明			不明	
クリム自治共和国	3.9	1.0	2.4	3.2	0.9	2.0	4.8	1.0	2.8
マリ自治共和国	3.6	0.9	2.1	3.0	1.0	1.9	3.6	0.9	2.2
モルドバ自治共和国	3.6	0.9	2.1	3.0	1.0	2.0	3.7	0.9	2.1
ドイツ沿ボルガ自治共和国	16.8	3.4	9.6	3.2	0.9	2.0	12.7	4.1	12.0
北オセチア自治共和国	4.5	1.0	2.6	3.1	0.9	2.0	5.7	1.0	3.2
チェチェン・イングーシ自治共和国	3.9	1.0	2.4		不明			不明	
ウドムルト自治共和国	4.7	0.9	2.6	3.2	0.9	2.0	5.2	0.9	2.9
チュワシ自治共和国	3.5	0.9	2.1	2.9	1.0	2.0	3.6	0.9	2.1
スベルドロフスク州	—	—	-0.5		不明			不明	
沿海クライ	4.4	0.6	2.5	1.9	0.7	1.3	7.0	0.4	3.9
ウスリー州	16.2	1.0	8.5	2.9	1.0	1.9	24.1	1.0	12.0
ハバロフスククライ	—	—	-12.6		不明			不明	
内アムール州	3.2	1.3	2.3	3.8	1.1	2.4	2.8	1.5	2.2
エベンキ・アムール州	5.2	1.5	3.4	3.1	1.3	2.2	5.6	1.5	3.7
サハリン州	3.8	1.5	2.7	2.9	2.0	2.4	4.7	1.0	3.0
ユダヤ自治州	3.0	0.7	1.9	1.3	0.6	1.0	6.6	0.9	3.8

「20世紀のロシアの人口　第1巻」360～362頁

ったとされているが、その時にラーゲリなどに収容されている囚人と軍人の移動、再配分が行われ、このことが極東地方の人口数に影響を与えたのである。ジロムスカヤが指摘するように人口の水増は、一九三〇年代初の飢饉により人口が著しく減少した地域に大きいという地域的に不均等な水増を行い、さらに囚人の地域的再配分を実施したのである。

この場合ラーゲリの囚人リストを人口減の著しい他地域へ移し、一般市民のセンサスリストに混ぜ合せたのである。それが七五万人といわれる囚人にあてはまる。[27] 囚人リストの大きな流出地は極東地方の沿海、ハバロフスククライがカレリヤ、コミ自治共和国などとともに数えられる。

このようにして多くの地域で人口の二パーセント前後の水増が生じたが、飢饉の影響の大きいドイツ人自治共和国では約一〇パーセントも水増しされた。

一方、人口の縮少は若干の地域で生じたが、カレリヤ、コミ自治共和国と並んでハバロフスククライで大きく、一二・六パーセントの縮少であった。極東地方で多くの行政地域は水増され、ウスリー州で大きく八・五パーセントの水増しで、特に農村で顕著（一二・二パーセント）であった。

極東地方の人口の取扱いについてもう少し触れると、ハバロフスククライはセンサス公表人口一四五万九、七二九人であるが、二三万二、五三〇人が他地域に移されたので、極東地方の人口は一六六万九、一三九人となり一二・六パーセントの減少となった。極東地方の各行政地域では沿海州二万二、四三二人増（二・五パーセント）により実数四三万八、二九九人、下アムール州三、二四九人（三・四パーセント）で実数九万五、二三一人、アムール州九、九六〇人（二・三パーセント）四三万八、二九九人、サハリン州二、六四五人（二・七パーセント）九万七、二八〇人、カムチャッカ州は不明であった。従って、極東地方は実数より一六万人の減少となる。要するに全ソ連で水増人口の中で他地域へ配分された囚人が七五万人余いて、全ソ連の人口の水増し二五〇万人から差し引く必要があるということである。[28]

三　ロシア極東地方の人口増と人口流出入

三―一　人口の流入

一九二〇、三〇年代の極東地方の人口は一八〇万人増（一九二〇年の人口九五万人から一九四〇年の人口二七五万人へ）とリバコフスキーは記し、その内自然増四六万人、流入者一一〇万人、流入者の自然増一九万人とみなし、約一三〇万人が流入関連人口と考えている。[29] 従って流入関連人口は極東地方の全人口の四分の三を占めたので、この地方の人口増の大半は流入人口によるといってよく、この時期のソ連の他地域に比べてきわめて高い比率であった。また、流入は一九三〇年代後半七五万人、前半五〇万人、一九二〇年代後半三〇万人、前半二五万人で、[30] 行政や地域別では表2の通りで、サハリン州の三〇年代の二〇年代に比べて六倍強の増加が際立っている。その他マガダン州、ハバロフスククライの増加率が高かった。

前記のような高い人口増は独ソ戦までの三つの五カ年計画で極東地方の開発が進展したことによる。特に、鉱工業の開発が急速に進められ、中でも北部の未開発地でそうであった。ダリストロイによるオホ

ーツク海岸、コリマ川流域の広大な面積をもつ（八〇万平方キロ）地域で行われた総合開発が代表例である。ここでマガダン市、ナガエボ港、総延長八〇〇キロに及ぶ自動車道などの建設が行われ、囚人労働がそれに利用されたのである。[25]

アムール下流のコムソモリスクにもコムソモールを中心に都市がつくられ、造船、製鉄、航空機、木材工場が建設され、人口が急増した。コムソモリスクはドニエプルストロイ、トルクシブ、クズネックストロイ、マグニトカと並ぶソ連の重点開発地で、一九三二年政府の呼びかけに応じた三、七四七人のコムソモレツが一九三二年コムソモリスクに到着して開発が進められた。さらに市内に収容所がつくられ多数の囚人が投入された。市の発展は目ざましく、一九三九年には人口七、一万人を数えるまでに成長した。[26]また、ユダヤ自治州にもユダヤ人を中心に農、工業従事者が入り、一九三〇年代に二万数千人のユダヤ人が到来している。[27]

三―二　人口流出―朝鮮民族の強制移住

極東地方からの人口の流入は前述のように国内からの流入、特に囚人の移動が目立っていた。同時に帝政時代にみられた外国人の流入―朝鮮、中国、日本人の流入は、ソ連が鎖国同様の政策を採ったために激減し、ほとんど無きに等しい状況であった。[28]しかし、後述するように若干の流入が認められた。

両大戦間の外国人やソ連定住の非ロシア民族の人口移動の中で、顕著で規模の大きい人口流出は、ここで取扱っていない内戦期の人口流出を除くと極東南部に居住していた朝鮮民族の中央アジアへの強制移住である。このことについてはわが国及び韓国の研究者により解明されてきていて、強制移住させられた人数がほぼ正確に把握されている。リバコフスキーは一五万人としていた。[29]ブガイによれば三万六、四四二家族、一七万一、七八一人であり、他にカムチャッカ、極東クライにいた七〇〇人が移送されたことになっていた。[30]これについてはクージンも同様の数字をあげていて、ウズベキスタンへ一万六、二七二世帯七万六、五二五人、カザフスタンへ二万一七〇世帯、九万五、二五六人が移住したと記している。[31]

また、一、一万人の中国人、数百人のポーランド人が移住させられたが、彼らのその後の状況は明らかでないとされている。[32]

なお、ペレストロイカ以降の人口流入の流れの一つにかつて強制移住させられた中央アジアからの朝鮮人の帰還と中国人労働者の流入と半定住化であろう。

中央アジアから極東地方への朝鮮人の移動は一九九〇年代初めのアンケート調査によると回答者の約半数が極東地方に自治権が認められれば帰るという結果が出ている。[33]これから推測すると最大一二万人の移住ということになる。

しかし、極東地方で朝鮮人の自治区を設けることは地元民の反対で実現しなかったこともあり、その数は当初考えられたより少なかった。それでも公式統計で九〇～九八年に一万人前後が流入している。ただし、他の公式報告では流入者は一、五万人あるいは一、八万人とし、帰還運動のリーダーの評価では三万人としていて少くとも一万人前後でないことは確かなようである。[34]

他方、ソ連時代から朝鮮人民民主主義共和国やベトナムの労働者が

政府間の協定で働いていたが、ソ連崩壊後もこの流れは続き、新たに中華人民共和国からの労働者数が増加し、韓国からも流入している。[35]

外国人労働者、特に中国からの中国人労働者の流入に対するロシア人の警戒感は、中国商品の急激な流入とともに強くなっていたが、九〇年代中ごろの国境貿易の規制、中国商品の品質の悪さ、また、ビザ規制もあって中国人労働者の流入増は止った。ロシア側も一時期の多数の中国人労働者の流入という危機感が影をひそめ、客観的にその流れの実態をみつめるようになり、流入数もいわれたほど大きくないということになってきた。[36]

また、第十八回日ロ学術シンポジウム（二〇〇二年）でもロシア側の冷静な評価が印象的であった。ロシア極東の沿海州でもバクラーノフの発表のように、[37]今後の沿海州の経済の発展に中国人労働者が必要であり、沿海州の将来の人口の一〇パーセント、二〇～三〇万人の流入は問題ではないと述べている。

結びにかえて

ロシア極東地方の両大戦間の人口流入は、ロシアの他の経済地域に比べて絶対数でも居住人口規模からみても極めて大きかった。これまでの流入人口の内訳が軍と治安機関の資料が秘密扱いにされていたので不鮮明であったが、最近の資料公開により明らかになった。特に、囚人の収容者数、移動数が明らかにされてきた。

同時に一九三七、三九年センサスの人口数と極東地方の人口実数との乖離が明らかになり、その原因が究明されるようになった。その結果、極東地方では実数より少なくなるセンサスが公表されたこと、国内の不自然な人口減少地域への極東地方から囚人数の一部が書類上で移動させられたことが明白になった。それでも極東地方の流入人口が大きく、人口の急増現象に変化がなかった。

一方、流出人口は流入人口より少ないが、その中で最も大きい朝鮮民族の中央アジアへの強制移動は、近年の情報公開により正確な数が把握できるようになった。強制移動させられた朝鮮人の帰還運動があるが、目下地元の受入姿勢と帰還希望の朝鮮人の要求に隔りがあり、帰還者数はまだ少ない。

近年は外国人を含む人口移動についての詳しい資料が公表されるので、中国人労働者などの動きも分っているが、今後これまで公表されることの少なかった一九三〇年代の人口動態が現在同様明らかにされることが期待される。

註

① 拙稿「ロシア極東地方の人口移動とその特性」（『東アジア研究』第二九号）
② Рыбаковский Л.Л., Дальнего Востока за 150лет, М., 1990.
③ 例えば、島村史郎『ソ連の人口問題』一九八五年、教育社にソ連の国勢調査について簡単であるが触れている。
④ Жиромская В.Б., Демографическая история России в 1930-е годы, М., 2001, с.34.
⑤ 同 c.35.
⑥ 同 c.49.
⑦ Исупов В.А., Демографические катастрофы и кризисы в России в первой половине XX века, Новосибирск, 2000, с.19.
⑧ 同 c.20.
⑨ 同右

⑩ 前掲④ c. 49.
⑪ 前掲⑦ c. 22.
⑫ 前掲④ c. 43.
⑬ Население России в XX веке, том. 1. 1900～1939, М., 2000, с. 277.
⑭ 同 c. 282～285.
⑮ 同 c. 300～302.
⑯ 『社会主義の20世紀』第四巻 一六五、一六六ページ、日本放送出版協会、一九九一。前掲③六七、六八頁。
⑰ 前掲⑦ c. 118.
⑱ 前掲⑬ c. 311.
⑲ 前掲⑬ c. 315.
⑳ 同右 c. 321, 326.
㉑ 前掲④ c. 52.
㉒ 同右 c. 50.
㉓ 前掲② c. 113.
㉔ 同右 c. 108.
㉕ 前掲② c. 83.
㉖ Комсомольск на Амуре, Хабаровск, 1982, с. 16～21.
㉗ 前掲② c. 83.
㉘ 拙論「ロシア極東地方の人口移動とその特性」(『東アジア研究』第29号) 参照。
㉙ 前掲② c. 110. 移住した少数の中国、日本人を含む数字である。
㉚ 前掲⑬ c. 334.
㉛ 李愛俐娥『中央アジア少数民族社会の変貌』二〇〇二年、昭和堂。アナトーリT. クージン『沿海州・サハリン 近い昔の話』凱風社、一九九八、一六一頁。
㉜ 前掲⑬ c. 334.
㉝ Вашук А. Миграция как фактор развития корейской диаспоры в Приморье (90-е гг. XX в.), в "Диаспоры 2001, 2-3. М., с. 174.
㉞ 同右 c. 175.
㉟ 拙論「ロシアの人口移動（十八～二十世紀）とその特色（『史窓』第五八号）参照。
㊱ これについては本田良一『揺れる極東ロシア国境を行く』一九九六年、北海道新聞社、岩下明裕『中・ロ国境四〇〇〇キロ』二〇〇三年、角川選書。
㊲ Бакланов, П. Я., Состояние, проблемы и перспективы использования иностранной рабочей силы в Приморском крае, с. 3.（シンポジウム発表要旨）

付記 この研究は平成十四年度京都女子大学研究助成金を利用している。